《論文》

島嶼集落における地域支え合い活動の現状と課題

―地域支え合い活動の代表者への聞き取り調査をもとに―

大山　朝子

／論文

島嶼集落における地域支え合い活動の現状と課題
―地域支え合い活動の代表者への聞き取り調査をもとに―

大山 朝子

和文抄録：本稿では、従来型地域コミュニティとは異なる機能団体として新たな活動を展開している島嶼集落における地域支え合い活動について、福祉的資源という視点から検討することを目的とした。

取り組みの特徴としては、マップづくりが多くの活動団体形成に至る契機となった点、参加者以外の集落住民も活動拠点を活用・交流するなどの変化が生じたり、活動が休止している婦人会と老人クラブの代替的機能を果たすなどの副産物を得たグループがあった点があげられる。また、後方支援としての行政のかかわり方についても、グループの活動紹介を行う交流の場を設ける等の工夫が見られた。

地域支え合い活動は住民自身の意識の向上、ひいては住民の自助・互助の再認識をも生起させていた。その結果、福祉課題への即時的・直接的な対策を志向するだけでなく、住民主体の地域の望ましい状態を模索する解決志向的な取り組みが確認できた。

キーワード：島嶼集落、福祉的資源、マップづくり、副産物

Ⅰ．目的

2008（平成20）年３月に厚生労働省社会・援護局長の下に設置された、これからの地域福祉のあり方に関する研究会は、「地域における『新たな支え合い』を求めて―住民と行政の協働による新しい福祉―」と題する報告書を取りまとめている。同報告書では、福祉ニーズのある人びとが地域での自立した生活や自己実現を目指す際、直面しているのは、福祉問題というよりむしろ生活問題（具体的にはゴミ出しや庭木の手入れなど）であり、それらに対する支援（専門的な技術を必要としない）が日常的でかつ継続的に必要であるということを指摘している[1]。

以上をふまえ、「地域における『新たな支え合い』」を住民と行政の協働のなかで再検討しようという提案がなされた。実際、現行施策で対応できていない生活問題は、施策が充実することで解決できるものもあるが、制度的サービスでは対応できないものがある。それらへの対応は、対象を限定せず、制度を超えたさまざまな社会資源のネットワーク、フォーマルとインフォーマルなサービスの連携、住民参加による福祉活動などといった地域福祉の力によるところが大きいため、この報告書に基づき、身近な地域で住民相互の支え合い活動を促進し、福祉活動を活性化することを目的とし、市町村に対し地域福祉活動専任担当者の配置、拠点づくり、見守り活動などの支援を実施する「地域福祉活性化事業」を同年度より試験的に実施されている[2]。

今回取り上げる島嶼集落は、相互扶助（互助）の伝統等、地域独自の文化あるいはその精神が根強く残っているといわれることも少なくないが、その地理的状況から他の島嶼と地域同様に人口減少・高齢化・過疎化の

進行による従来からの地縁団体を中心に据えた地域コミュニティの存続が危機状態にあり、その機能の低下を余儀なくされている。そこで本研究では、共同体の持続を前提とした人間同士の関係性と営み、とくに地域文化、結い等の生活互助等の互助慣習を基底としつつも従来型地域コミュニティとは異なる機能団体として新たな活動を展開している島嶼集落における「地域福祉活性化事業」としての地域支え合い活動について、福祉的資源という視点から検討することとした。

Ⅱ．方法

1．対象地域の概要

調査対象地域である鹿児島県奄美大島Ａ村は、北緯28度20分、東経129度20分、鹿児島市と沖縄本島の間にある、奄美大島の南西部に位置し、北は東シナ海に面し、背後は山々が連なる海岸線に点在する11の集落から構成される。気候は亜熱帯海洋性気候で気温が温暖で降水量が多く、台風の襲来も頻繁にある。主な産業は農業であり、「果樹の村」として知られている。また、環境省の奄美生物保護センターがあり、奄美の動植物の学習ができる村づくりにも取り組んでいる。

2．調査対象者の属性

調査対象者はＡ村の集落の地域支え合い活動グループの代表者もしくは副代表者11人（50～60歳代の男性４人、女性７人）である（表１）。

表１　調査対象者の属性

	地区	仮名	性別	備考
1	B	b	女性	元民生委員
2	C	c	男性	村議会議員
3	D	d	女性	民生委員
4	E	e	女性	民間介護支援事業所（奄美市）職員
5	F	f	女性	民生委員
6	G	g	女性	民生委員で地区の共同売店の代表者
7	H	h	男性	元公務員
8	I	i	男性	区長
9	J	J-1	男性	元区長
10		J-2	女性	地域包括支援センター嘱託職員
11	L	l	女性	民生委員

3．調査方法

本研究では、Ａ村のほとんどの集落（１地区を除く）で地域支え合い活動を実施しているＡ村の活動グループ代表11人（男性４人、女性７人）に対し行った、聞き取り調査のデータを対象とし、分析することとした。調査時期は2014（平成26）年９月～11月、調査方法は半構造化面接により、１回につき約１時間の聞き取り調査を実施した。

4．調査の内容

地域支え合い活動の代表者等への質問事項として、以下の項目を設定した。①活動体制（構成員の人数・性別・年齢など）、②現在の活動内容（場所・活動日・活動回数・運営資金・具体的な内容）、③活動開始以前の類似の活動の有無、④活動グループ形成から活動開始までの経緯、⑤活動の課題および今後の展望についてである。

5．倫理的配慮

本研究は調査対象者に対する倫理的配慮について、鹿児島国際大学教育研究倫理委員会の承認を得た上で実施した。具体的には、面接の際に調査の趣旨とともに、①回答は自由意志であり、回答したくない場合は回答しなくても構わないこと、②調査は個人が特定できないよう統計処理すること、を説明し同意の上で行った。

Ⅲ．結果

1．集落における人口

以下に2018（平成30）年12月31日現在の集落別の人口の統計を示す（表２）。A村の総人口は、住民税務課によると2018（平成30）年12月31日現在で1,491人である。また、鹿児島県の統計による2017（平成29）年10月１日現在の生産人口は40.9％、高齢化率は40.6％となっている。

表２　人口・世帯数

地区	人口	男性	女性	世帯数
B	116	60	56	65
C	93	50	43	45
D	138	61	77	78
E	138	67	71	71
F	250	127	123	136
G	250	118	132	146
H	90	45	45	53
I	110	42	68	92
J	196	100	96	113
K	7	4	3	6
L	103	56	47	58
合計	1,491	730	761	863

2．活動の組織体制（役職者および構成員の人数・性別・年齢など）の概要

組織体制としては、会長・副会長・会計等の役職者がおり、それを補完する形で世話役や協力者を配置している団体がほとんどであった（表３）。活動への毎回の参加者数は各団体により異なるが、およそ15～25名ほどである。なお、役職における性別の偏重はないが、女性が会長である場合は、そのすべてが民生委員および民生委員経験者であった。

表3　活動の組織体制の概要

地区	役職者等
B	会長（女性）、世話役（５～６人）
C	会長（男性）、７～８戸の農家
D	会長（女性）、世話役（女性３人）
E	会長（男性）、副会長（男性１人、女性１人）、会計（女性１人）、協力者（女性３人）
F	会長（女性）、世話役（女性３人）
G	会長（女性）、世話役（男性２人、女性２人）、ボランティア（男性９人、女性９人）
H	会長（男性）、副会長、事務局長、役員、会計、協力者（男性８人）
I	会長（男性）、副会長（女性１人）、世話役（女性６人）
J	会長（男性）、世話役（女性８人、男性７人）
L	会長（女性）、会計（女性１人）、世話役（女性３人）

3．現在の活動概要（場所・運営資金・具体的な活動内容）

活動場所としては、独自に設置した活動拠点が６グループ、公民館（集落の既存の施設を含む）が４グループとなっており、活動の開始に合わせ独自に拠点を設置したグループが半数以上を占めた（表４）。一方、既存の施設のなかには共同売店[3]を活動拠点としているグループがあった。共同売店は集落の直営が基本で、集落から数人の理事を選出し、理事会や総会で確定した方針に基づき、代表が交代で勤務し運営するというものであるが、近年地域の人びとの居場所としても注目されており、Ｇ地区においても同様の役割を果たしていると考えられる。

表４　活動拠点

地区	活動拠点
B	空き事務所を改装「赤とんぼ」
C	公民館
D	新築「集いの家」
E	新築「みんなのお家」
F	公民館
G	共同売店
H	新築「よらわんば」
I	空き家を改装
J	倉庫を改装「笑談所」
L	公民館

独自に設置した活動拠点を持つグループでは、「土日は青壮年団もボランティアで手伝って作った」「自分達で手作りで改造して憩いの場を手作りで創りました」「自分達の秘密基地みたいな感じのイメージはあると思うんですね」と建物を造ったり「自分の家にあるのを使ってとかで、だからうれしいと思うんですよ、お年寄りなんかも」という備品の調達等の協同作業による仲間意識の醸成がみられた（表５）。

表5　支え合い活動の代表者等の語り①：活動拠点

語り手	内容
d	最初は公民館使用でも良いんじゃないかって言っていたのですが、公民館使用だと区長さんとか集落みんなの許可が要ることと・・・集落委員会などで話し合って、総会にかけて、みんなの許可をもらってここに作ることになりました。・・・そこから一気に話が進んでいって去年（平成23年）の11月から３月にかけて、大工さんも入って、土日は青壮年団もボランティアで手伝って作った形ですね。
h	この小屋自体がその青壮年でつくり上げたものですから、やっぱりその青壮年にとったら自分達の秘密基地みたいな感じのイメージはきっとあると思うんですね。これはもう半年がかりで手作りですので。丸太木を切ってきて、皮をはいで焼いて、みんな毎週日曜日ごとにコツコツと青壮年が作った小屋なんです。
j-1	こっちはもともと倉庫だったんですが、この部分を改造して自分達で手作りで改造してこの憩いの場を手作りで作りました。
j-2	このテーブルは役場、あとあれはこっちの個人のもといって、食器なんかも少しは買ったんですけど、後は自分の家にあるのを使ってとかで、だから嬉しいと思うんですよ、お年寄りなんかも。

＊了解を得て録音した語りを文章化したものから一部を抜粋した。語りの言葉をそのまま記載した。
＊強調された語りや支え合い活動への思いを象徴していると思われる語りには下線を引いた。

運営資金には、グループメンバーによる活動への参加費、農作物販売（花の苗なども含む）、惣菜販売、公共施設清掃、散髪、草払いなどの活動から生じた利益の一部が充当されていた（表６）。

表6 運営資金

地区	運営資金
B	公共トイレの管理委託費の一部、農作物販売の1割、食事会のワンコイン
C	野菜の販売手数料、赤い羽根助成
D	
E	サロン参加費（100円）、集いの家使用料500円、花の苗販売代金
F	食事会参加費（100円）
G	惣菜販売、ミニサロン参加費（100円）
H	飲み会の酒代の差額、トイレ清掃委託費
I	サロン参加費（100円）
J	サロン参加費（100円）、散髪代500円、草払い代1000円、野菜と大根販売代金
L	会員会費（300円／月）

運営資金の源ともなっている活動内容としては、各集落に共通するサロン活動を通じた見守り活動、食事会のほか、農作物販売（花の苗など含む）、惣菜販売[4]、健康教室、グラウンドゴルフ、料理教室、手芸、日帰り旅行、カラオケ、誕生会、伝統芸能の継承活動、清掃活動（集落・公共施設）、見守りおよび庭の草取り作業のボランティア活動など、集落ごとに多彩な活動が展開されていた（表7）。

表7 具体的な活動内容

地区	活動内容
B	農作物販売、健康教室、ワンコイン食事会
C	野菜の販売、日帰りバス旅行
D	カラオケ（第4水曜日）、手芸、サロン、料理教室など
E	サロン、神社の清掃、花の苗販売
F	ワンコイン食事会（カレー等）、見守りなど
G	惣菜販売、庭の草取り、サロン、虚弱高齢者のミニサロンなど
H	サロン、カラオケ、トイレ清掃など
I	グラウンドゴルフ（日曜日）、サロン（第3土曜日：ワンコインお茶飲み）、いきいき体操（第3土曜日）
J	サロン（土曜日：ワンコイン喫茶）、散髪、草払い、野菜や花の販売、島唄継承、黄色い旗など
L	グラウンドゴルフ（週3回）、清掃（月1回）、誕生会（月1回）、カラオケ（雨天時）、八月踊りの唄の継承活動

なかには水が豊富で集落が管理する農業用水も整備されている環境における農作物栽培および販売の活動[5]や集落にある小学校側からの依頼を受け、三味線と島唄の放課後学習支援を行っている活動[6]など、以下の語りからは、それぞれの集落の特色を活かした活動がなされていた（表8）。

表8　支え合い活動の代表者等の語り②：活動の概要

語り手	内容
c	ここの集落はですね、まず集落のばあちゃんたちが個人で無人販売所で物を売るっていうのが○○集落の一つの特徴で、昔から集落の高齢者の方は結構野菜作りとか、農業生産の意欲がけっこう高いんです。
j-2	週一の島唄もあるんですよ。メンバーが男性２人いるんですけど小学校に教えにも行っています。
l	今やっているのは、週３回のグラウンドゴルフとグラウンドゴルフ場の草取り、月１回のボランティア活動としての集落内の清掃、誕生会、そして年１回の食事会です。・・・雨の日はカラオケをしたり、八月踊の歌を習う機会にしたりしています。

＊了解を得て録音した語りを文章化したものから一部を抜粋した。語りの言葉をそのまま記載した。
＊プライバシー保護のため、具体的集落名は、○○と変更した記載した。
＊強調された語りや支え合い活動への思いを象徴していると思われる語りには下線を引いた。

4. 活動開始以前の類似の活動の有無

なお、活動開始以前における類似の活動は存在していなかったが、「名瀬にカラオケをしに毎月１～２回通っているというグループがある」と同じ趣味を共有して、活動をしていた人びとの存在が確認できた（表９）。

表９　支え合い活動の代表者等の語り③：類似の活動の有無

語り手	内容
d	それは、ある方が中心になって誘って、それが○○集落だけではなく○○とかよその集落からも来て、７～８人で車２台に乗って名瀬にカラオケをしに毎月１～２回通っているというグループがあるというような話を聞きました。

＊了解を得て録音した語りを文章化したものから一部を抜粋した。語りの言葉をそのまま記載した。
＊プライバシー保護のため、具体的集落名は、○○と変更した記載した。
＊強調された語りや支え合い活動への思いを象徴していると思われる語りには下線を引いた。

5．活動団体形成から活動開始までの経緯

活動団体形成に至る契機は、大きく２つに分けられる。2011（平成23）年４～８月に行政からの声かけで集落ごとに開催されたマップ作り[7]に参加することで、集落の現状を目の当たりにし、自分達の力でできることをやろうと集落の人たちに声をかけ活動を始めた６グループと行政からの声かけで活動を開始した４グループである。前者に該当する団体では、マップ作りを通じて、地域が今どのような状況にあるのか、そして「人」、「環境」という地域に潜在的に存在する資源に気づくことが活動のきっかけになっていた[8]。なかにはマップ作りへの参加からしばらく（２年ほど）してから、活動グループの立ち上げに取りかかった集落もあった（表10）。

表10　活動団体形成から活動開始までの経緯

地区	団体の発足年	活動の経緯
B	2011（平成23）年	マップづくりの後の話し合いで、「何かできるんじゃないか。」「できるかもよ。」「しようよ。」となった。
C	2011（平成23）年	マップづくりの後、役場から補助金の話があり、野菜作りをしている高齢者のために耕運機を買って支え合いができないかと考えた。
D	2012（平成24）年	マップづくりの後で、役場から支え合い活動を勧められて「何かやろう」ということになった。他集落の活動を見て「この集落でも何かしないと」と考えた。
E	2013（平成25）年	マップづくりで支え合いの必要性を知った。母を見て介護保険のサービス以外に何かあればと考えていた。役場で会立ち上げへの補助金の話を聞いて区長に相談し賛同を得た。声を掛け合う関係が必要と始めた。

F	2014（平成26）年	マップづくりには参加していない。母と同居するために集落に帰り、できることは何でもやろうと考えて民生委員を引き受けた。役場からこの集落だけないから作れないかと言われ、老人クラブを母体として始めた。
G	2011（平成23）年	マップづくりで、どういうのが必要かを学んだ。お年寄りからおかずを買ってきてと頼まれる経験があった。身近でできることからやってみようと思った。以前、夜間徘徊のケースがあった。
H	2012（平成24）年	役場から話があって、集落を活気づかせるきっかけになると思って声をかけたら、賛同者がいたので始めた。若い夫婦が入って来れるような集落にしたい。
I	2013（平成25）年	役場から話があって始めた。
J	2011（平成23）年	マップづくりで男性の寄り合い場の存在を知り、男性達に「こういう風にしたいのだけれど」と相談した。恩返しではなく今しかできないという気持ち、今しておけば自分たちが年を取ったときに頼める。
L	2011（平成23）年（2012（平成24）年に再発足）	2013年に区長を中心に会が発足した。民生委員が会長を引き受け2014年から月会費300円で会員を募集して再発足した。

語りからは、マップ作りを直接的な契機としたグループでは、「勉強が終わった後、先生と一緒に食事をしようということになって、この４人が集まってから自分達で何かできるじゃないか、できるかもよ、そういった感じで始めた」「マップ作りをした時に気づいたのですが、男性の寄り合い場があるのでこれは何だろうと思い、そこに行って『こういうふうにしたいんだけど』ということを話しました」というマップ作りの際に気づいた集落の現状や講師との会話から支え合い活動を開始することの必要性を感じた様子、行政からの直接的な働きかけによって団体を立ち上げたグループの「本当にまだできたばかりなので、続けていけるように、初めから無理をしないようにと思っています」とその存続が重荷にならないような活動展開への配慮がうかがえる（表11）。

表11　支え合い活動の代表者等の語り④：活動開始までの経緯

語り手	内容
b	私が民生委員時代の平成23年４月ぐらいに、地域の協力者４～５人で『住民流福祉』ということでマップ作りに参加したことからスタートしました。・・・（中略）・・・民生委員の会でこういったものがあるという呼びかけがあって、それからその後、集落での勉強会があって、先生と２回目の会の後、たしか平成23年６月８日に勉強が終わった後、先生と一緒に食事をしようということになって、この４人が集まってから自分たちで何かできるんじゃないか、できるかもよ、そういった感じで始めたんですよ。
e	介護保険のサービス以外にちょこっと行ける様な、何かそういう様なものがあったらなあ、なんて思っていたんです。というのは、以前地域のマップを作りに来た先生がいらっしゃいまして、その先生の話の中でも今からは昔ながらの地域のお互いの支えが必要だって話を聞いていたので、それが頭に残っていたんです。
j-2	マップ作りをした時に気づいたのですが、男性の寄り合い場があるのでこれは何だろうと思い、そこに行って、『こういう風にしたいんだけど』ということを話しました。女の人は寄り合いあるけど男の人にはなかなかなくて、Iターン者のところにみなさん結構集まっていました。
l	平成25年の９月からです。最初は区長さんが代表も会計もされていました。規約とかも区長さんが作られました。実は私は昨年の12月から民生委員をしていますが、その関係で平成26年４月から区長に頼まれて会の代表をやっています・・・（中略）・・・本当にまだできたばかりなので、続けていけるように、初めから無理をしないようにと思っています。

＊了解を得て録音した語りを文章化したものから一部を抜粋した。語りの言葉をそのまま記載した。
＊強調された語りや支え合い活動への思いを象徴していると思われる語りには下線を引いた。

6．活動の課題および今後の展望

活動の結果、半数以上のグループで「高齢者が畑仕事に精を出し元気になった」「サロンにおしゃれをして来る」「ミニサロンの参加者に笑顔を取り戻した人がいる」という高齢者の参加者のプラスの変化、高齢者の変化にあわせた「お年寄りの喜ぶ顔が生きがいになっていて、支え支えられの関係が作られてきた」という他の年齢層への影響などが確認できた。また、「この場所は、私達『〇〇会』が主流ですけど、本当はみんなに使って欲しいと思っています」「集落の老人の方々とかあるいは小学生の子供達とかが帰宅中にこっちに寄ります」など他の年齢層の住民との交流の場として活用されたり、さらには集落において休止している団体の代替的役割を担っているグループもあった（表12）。

表12　支え合い活動の代表者等の語り⑤：活動による変化

語り手	内容
b	高齢者が畑仕事に精を出し元気になった。荒れ地が畑にもどった。共通話題ができた。集落全体が明るくなった感じがする。
d	サロンにおしゃれをして来る。久しぶりに会う人もいて話が弾む。
	この場所は、私達「〇〇会」が主流ですけど、本当はみんなに使って欲しいと思っています。・・（中略）・・夏休みは、子ども達向けの人形の着物作りですね。これは、去年なのですが、その時は子ども達が５～６人参加しましたね
e	誰でもいつでも使っていいよっていうのが〇〇です。だからそこで子ども達が勉強をしてもいいし、サロンではなくてちょっと使いたいなって時はそこで鍵を自由に開けて使っても良いし。ただし日誌が置いてあるので、それには使った旨を記録してもらう様にはしています。
g	惣菜販売が好調です。ミニサロンも人数が増えた。ミニサロン参加者に笑顔を取り戻した人がいる。
h	１時から５時までここは開いていますから、その間は集落の老人の方々とかあるいは小学生の子供達とかが帰宅中にこっちに寄ります。
j-2	サロンは認知症予防、引きこもり予防、生活リハビリに一役かっている。お年寄りの喜ぶ顔が生きがいになっていて、支え支えられの関係が作られてきた。
l	婦人会と老人会は中心になる方が亡くなられたり、また長になる人に負担がかかるということで解散したままです。集落全体ではだいたい100名ぐらいですか・・・。

＊了解を得て録音した語りを文章化したものから一部を抜粋した。語りの言葉をそのまま記載した。
＊プライバシー保護のため、具体的集落名等は、〇〇と変更した記載した。
＊強調された語りや支え合い活動への思いを象徴していると思われる語りには下線を引いた。

課題としては、現在行っている活動の安定的な継続への不安として、例えば参加者（男性・若者を含む）や活動内容に偏りがあること、運営資金の安定的確保の必要性などがあげられていた。他方では今後の展望として、参加者の負担が過重にならないような活動を目指しながらも、運営資金については自分達の活動参加費、活動で得た資金、行政が実施しているポイント制度[9]などを活用し、それらを運用しながら、さらにその活動内容を拡大しようとするグループの存在も以下の語りより確認できた（表13）。

表13　課題・今後の予定について

地区	今後の予定
B	現在の活動を無理しないように続けていきたい。
C	健康チェックをしてお茶のみの交流会をする。八月踊りの唄の継承を会の活動に入れたい。
D	子ども、青壮年、男性高齢者を含めた集落の全員が参加する。会長主導なので世話役さんたちに会の運営に積極的に関わってもらう。会の中身を濃くしていく。
E	運営資金を作る。会の集まりを定例化する。引きこもり高齢者にも参加してもらうよう声かけをする。バス旅行など集落内の交流を図る行事を入れる。
F	ポイント制度を利用して運営資金を確保する。グラウンドゴルフ場を整備して道具を購入する。カラオケセットや草刈り機を購入する。病人の付き添いや服薬管理を支援する。参加者を増やす。

G	惣菜作りの人数を増やす。惣菜販売を診療所や他集落の店でする。惣菜の移動販売をする。惣菜作りのスタッフに手当を出す。
H	集いの家の周りに公園ができトイレや駐車場ができる予定である。ドライブで立ち寄る人のために軽食やお土産を作って販売する。子供やおとり寄りにもっと気楽に来てもらい見守りをする。作った惣菜を集落内で販売する。
I	サロンに男性と若い世代の人の参加を促す。
J	無理をしないで各人ができることをしてこの会を継続していく。
L	ポイント制度を利用して運営資金にする。年１回食事会をする。

Ⅳ．考察

以上、鹿児島県奄美大島A村の集落における地域支え合い活動グループの代表者もしくは副代表者11人（男性９人、女性２人）に対し実施した調査項目について結果を整理してきたが、以下では地域支え合い活動を福祉的資源という視点から検討してみたい。

組織体制としては、会長・副会長・会計等の役職者がおり、ほとんどのグループでそれを補完する形で世話役や協力者を配置していた。活動への毎回の参加者数は各グループにより異なるが、15～25名程度であるため、参加者に対する役職者等の配置は十分であると思われる[10]。役職における性別の偏重はないが、女性が会長である場合は、そのすべてが民生委員および民生委員経験者であるという特徴があり、やはり地域活動の展開には民生委員の存在は不可欠であることがうかがえた。

活動場所としては、公民館（集落の既存の施設を含む）と独自に設置した活動拠点が半々であったが、独自に設置した活動拠点を持つ団体では、既存の施設とは別に自分達の活動拠点を作るという行為を通し、集団の力を結集する共属意識が生起したといえる。なお、既存の施設のなかの「共同売店」については、高い自治意識から生まれた協同組合的な運動の１つとして、活動拠点以外の機能についてその活用方法を検討すべきであると考える。

運営資金には、グループメンバーによる活動への参加費、農作物販売、惣菜販売、公共施設清掃委託費、散髪代、草払い代などの活動より生じた利益の一部が充てられていた。なお、活動開始時の拠点整備や備品等の購入については、すべて行政から初期費用として補助されており、行政によるきめ細やかな支援が行われていた[11]。しかし、その後の行政の対応は活動を見守り、交流会等でグループ間の相互学習を促進することに注力しており[12]、助成金の交付イコール行政主導ということを意味してはいなかった。

具体的な活動内容としては、農作物販売（花の苗なども含む）、惣菜販売、健康教室、グラウンドゴルフ、サロン、食事会、料理教室、手芸活動、日帰り旅行、カラオケ、誕生会、伝統芸能の継承活動、清掃活動（集落・公共施設）、見守りや庭の草取り作業のボランティア活動など、集落ごとに地域の特性を活かしたさまざまな活動が展開されていた。なかには農産物の販売で少額ながら経済的に利益を上げている高齢者の方々もおられ、地域支え合い活動に参加し役割を担うことで、社会での存在意義を認識し、生きがい感を獲得することができた方々もおられ、その意義が大きいことも確認できた。

なお、活動開始以前における類似の活動はほとんどの集落でなかったが、趣味活動（カラオケ）の共有をとおし、集落を超えて横断的に活動していた高齢者中心のグループが存在していたことが確認できた。このグループは地域とは関係ない団体であったとはいえ、同じ趣味を楽しむ機能集団であったことは間違いない。この点を指摘した代表者のグループを含め、シンプルな趣味活動が各グループの中心的活動内容となっていた点にも注目したい。

活動団体形成に至る契機は、マップ作りへの参加と行政からの声かけで活動を開始したグループに分かれたが、マップ作りが直接的な要因となり自発的にグループが形成され、地域支え合い活動が開始されたグループだけではなく、地域の世話役（区長・民生委員）さんたちへの行政からの働きかけなどによりその活動が開始

されたいわゆる外的な働きかけにより受動的に立ち上げられたグループにおいても地域支え合い活動が行われていることが確認できた。前者においては、福祉課題の掘り起こしを行い、住民の取り組みの方向性を探るということを目的とするマップ作りへの参加であったため、当然住民主体による活動が誘発されやすかったといえる。しかし、活動開始の経緯の相違による両者の活動状況の温度差は感じられなかった。背景には、行政の企画による交流会等におけるグループ間での相互学習の与える影響が関係していると考えられ、公的機関と地域住民の協働があってこのような自主的活動が可能となっていた。

効果としては、半数以上の集落で高齢者の方々が活動に積極的に参加されることで元気になり、参加者や集落の人びとにプラスの変化があったことが確認できた。例えば、野菜作りを主な活動にしているグループでは、高齢者が自転車で自宅と畑、無人販売所を行き来するなどして身体機能を維持し、日常生活に気持ちの張りといった生きがい感が生じていた。また、同じグループ内で中年のメンバーが高齢者にとって体への負担が大きい畝作りを支援するなど住民相互間の自発的な互助活動も生まれてきている。

さらに注目したいのは、副産物を得た集落の存在である。例えばある集落では、参加者以外の集落住民も活動拠点を活用・交流するなどの変化が生じたり、活動拠点が子どもたちの集まる場所としても活用されたりしていた。また、なかには活動が休止している自治会の婦人会や老人クラブの代替機能を果たしているグループもあった。以上のようにA村における地域支え合い活動は、新たなコミュニティとして注目を集めている「共生型ケア[13]」そのものであり、その活動には、福祉課題への即時的・直接的な対策を志向するだけでなく、地域の望ましい状態を模索する解決志向的な取り組みも確認できる。

他方では、今後の活動の実施に向けて、参加者（男性・若者を含む）・活動内容の偏重の是正や運営資金の安定的確保の必要性など、活動の安定的な継続への不安感があげられている。これらの課題を早急に解決することは難しいかもしれないが、グループのなかには、自分達の参加費や活動で得た資金を運営に充てながら、さらに活動内容を充実・拡大しようとする活動の活発化への志向性もあり、このような変化には目をみはるものがある。

V．おわりに

元来、地域コミュニティは伝統的には自治会、町内会、婦人会、青年団、子ども会等の地縁の団体が中心であった。しかし、近年の社会経済の変化に伴い、新たな地域コミュニティとして、子育て支援グループ、ボランティアサークル等の様々な機能を持つ団体が従来型の地縁団体と並び存在するようになった。このような状況の下、住民主体による地域活動をさらに展開するには、①圏域の設定、②協働体制の整備、③情報の共有化、④住民活動のための基盤整備、⑤地域福祉基礎圏域への専門的コーディネーターの配置の必要性が指摘されている。なかでも⑤に関しては、地域福祉の専門職（地域福祉コーディネーターないしはコミュニティソーシャルワーカー）の配置が必要とされ、その対応には、既存施策の１つとしての市町村社会福祉協議会の果たす役割が大きいと言われている。今後は、市町村社会福祉協議会が中心となり、住民と行政の協働や住民参加の推進役として「新たな支え合い」とは何か、「多様な協働」とは何か、ということを行政や地域住民や関連団体とともに議論し、「自分たちの地域における福祉とは何か」ということを考える必要もあるだろう[14]。

今回報告したA村での地域支え合い活動の取り組みの特徴には、①マップづくりが多くの活動団体形成に至る契機となった点、②参加者以外の集落住民も活動拠点を活用・交流するなどの変化が生じたり、活動が休止している婦人会と老人クラブの代替的機能を果たすなどの副産物を得たグループがあった点などがあげられる。また、後方支援としての行政のかかわり方についても、支え合い活動団体の活動紹介を行う交流の場を設ける等の工夫が見られた。活動開始の契機が行政の声かけや基盤整備によるところは大きいが、住民も行政も地域で何が必要か、自分たちには何ができるのかということを一人ひとりが考え、皆でアイディアを出し合い、多岐にわたる活動を展開している。そう言った意味で、まさに先にあげた報告書[15]の提案に対し、応えていこうとするものであるといえる。

地域は「①自然環境、②インフラ、③雇用、④教育、⑤伝統や文化」５つのファクターで成り立ち、そのうち１つでも崩れると、地域が崩壊し、再生には何十年もかかると言われており、とくに自然環境、伝統や文化などアイデンティティーに関わるものは、重要不可欠なものであるという[16]。過疎に悩む島嶼地域とはいえ、A村の地域支え合いグループの活動のなかには自然環境を生かした農作物の栽培や伝統芸能の継承活動などアイデンティティーに関わるものが少なくない。また、それらの活動の目的は住民同士のつながりづくり、すなわち地域の特性を生かした基盤づくりに重点を置いているため、住民の意識の向上、ひいては住民の自助・互助の再認識につながり、地域包括ケアシステムの中の自助・互助システムの基盤にもなりうるだろう。今後は活動の継続とともに、明らかになった課題をふまえ集落住民全体を巻き込んだ活動に発展させていく必要がある。住民主体で試行錯誤しながら活動を進めるため、当然多くの時間を費やす必要があるかもしれないが、今後の活動展開に期待したい。

謝辞　本調査にご回答いただいたA村地域支え合い活動の代表者・副代表者の皆様、調査実施にご協力いただいた関係機関の皆様に感謝申し上げる。

付記　本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）「琉球弧型互助形成にみる島嶼防災と地域再生実践モデルの開発評価に関する研究（課題番号：26285142）の一部として助成を受けた。

【注】

1　内閣総理大臣の下に設置された社会保障国民会議も、2008（平成20）年11月の最終報告書の中で「社会保障の制度設計に際しての基本的な考え方」の1つとして、「公私の役割分担・地域福祉の協働」を提示し、「公的支えである社会保障制度とともに、一人一人が地域社会の一員として様々な地域社会の支え合い･助け合いの仕組に参加し、共に支え合っていくことが重要である」という指摘をしている。

2　例えば、山口県社会福祉協議会『地域福祉の活性化をすすめるヒント　地域福祉活性化システム研究委員会報告書』には県内の萩市、平生町が地域福祉活性化事業のモデルの指定を受け事業に取り組んだ結果等が報告されている。

3　共同売店は共同店とも呼ばれ、沖縄においても約70店舗が運営されている。商品を販売するだけでなく、自動車による移動販売も行い、住民への配当や集落の各種行事への寄付、電話の取次ぎ、冠婚葬祭費の援助、買い物の代金代わりの切符を発行する等生活全般の利便性を確保しつつ、行政情報の伝達などの役割も果たしている。

4　大棚集落では集落住民が出資して運営する共同売店「大棚商店」を拠点に、1人暮らしの高齢者の要望や相談に応じるというボランティア団体が支え合い活動団体の前身として発足していた（南日本新聞社「高齢者の生活集落サポート『買い物代行、1人向け惣菜も販売』大和村大棚　結の会」2012年1月22日）。

5　集落にある無人販売所は24年前、余った作物を売るためにできた（南日本新聞社「幸いのシマ　大和村の挑戦（3）」2015年3月27日）。

6　名音小学校（児童8人）は地域と一体となって島唄学習に取り組んでいる。島内外で活躍する唄者を招いた学習もあり、生唄の迫力に触れた児童らは、島の伝統を継承することをあらためて誓ったと報じられ、地域と教育現場での一体的な伝統的芸能の継承活動の価値が報じられている（南日本新聞社「島唄伝承　地域と一丸　大和・名音小」2015年1月31日）。

7　木原孝久氏（住民流福祉総合研究所）による「めざすは『助け合いができる絆』作り」の講座における支え合いマップづくり入門をさす。木原氏はこの講座で「新しいおつき合いの提案」として、まず近所の住民の支え合いの実態を把握することを推奨している。

8　ある集落では、マップ作りである住民のお宅が集落の社交場になっていることが明らかになり、その後の活動のきっかけのヒントとなった（南日本新聞社「幸いのシマ　大和村の挑戦（2）」2015年3月26日）。

9　鹿児島県が実施している高齢者元気度アップ・ポイント事業。65歳以上の高齢者の健康づくりや社会参加活動に対して、地域商品券等に交換できるポイントを給付することにより、高齢者の方々の健康維持や介護予防、社会参加の促進を図る事業。平成30年4月現在36市町村（43市町村のうち）が実施している。

10　マップ作りを推進する木原氏は、助け合いは50世帯（顔が見える範囲）という小さな圏域でしかできないとの指摘をしている。

11　大和村地域包括支援センター早川理恵氏は、聞き取り調査逐語録で「そのお金がないことでやめてしまうよりはそのお金さえあれば動くのであれば必要経費という考えで、立ち上げの費用ですね。初年度に限ってということで、平成23、24、25と今3年ですね、やってみています」と述べている（小窪他2003：90）。

12　毎年、地域包括支援センターが主催する「大和まほろば福祉まつり」を、支え合い活動団体が後援し、会場に支え合い商店街を設置し、支え合い活動団体の活動紹介を行う等、交流の場を設けている。

13　共生型ケアとは、①地域のなかで当たり前に暮らすための小規模な居場所を提供し、②利用の求めに対しては高齢者、子ども、障害者という対象上の制約を与えることなく、③その場で展開される多様な人間関係を、共に生きるという新たなコミュニティとして形づくる営みである。

14　「新しい地域福祉」の推進に役立つ組織として、住民の福祉活動を発掘、育成し、地域住民が支え合う環境づくりを進めるために、社会福祉協議会が積極的な役割を果たすことができるように見直す必要があるのではないかという指摘がなされている。

15　2008（平成20）年3月に厚生労働省社会・援護局長の下に設置された、これからの地域福祉のあり方に関する研究会による「地域にお

ける『新たな支え合い』を求めて－住民と行政の協働による新しい福祉－」と題する報告書。

16 「地元学」の提唱者でもある結城登美雄氏によるものであるが、姜氏は実際に大牟田や筑豊の例をあげ、炭鉱で栄えていた町がエネルギーの主役が石油へと移行したため、今でもなお生活保護を受けている方たちが多いということを指摘している（上野谷他2009：50）。

【引用・参考文献】

上野谷加代子・大橋謙策（2008）「インタビュー“新たな支え合い”への期待」『月刊福祉』91（8）、全国社会福祉協議会、12-15

上野谷加代子・姜尚中・竹川正吾（2009）「Watching2009これからの日本をみる－地域社会の崩壊と再生」『月刊福祉』92（2）全国社会福祉協議会、50-52

川村匡由（2016）『脱・限界集落はスイスに学べ　住民生活を支えるインフラと自治』農村漁村文化協会

厚生労働省（2008）「地域における『新たな支え合い』を求めて－住民と行政の協働による新しい福祉－」

小窪輝吉・岩崎房子（2013）「大和村における地域支え合い活動の現状と課題－大和村地域包括支援センター早川理恵氏へのインタビューを中心に－」田畑洋一編『島嶼地域の保健福祉と地域再生－奄美・八重山の調査から－』平成23年度～平成25年度日本学術振興科学研究費補助金基盤研究（B）「琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究」（2011年度－2013年度、研究代表者：田畑洋一、課題番号23330190）研究成果報告書、80-96

小窪輝吉・岩崎房子他（2015）「島嶼集落における社会的かかわり状況と見守り、防災、医療体制について」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』（鹿児島国際大学）34（2）、45-63

佐藤貞良（2007）「新しい社会福祉支援システムと社会福祉協議会の役割」『社会福祉研究』99、鉄道弘済会、37-43

社会保障国民会議（2008）『社会保障国民会議　最終報告』

高野和良（2016）「過疎地域のコミュニティを支えるために－小規模化する世帯の増加から見えてくる課題－」『月刊福祉』98（3）、26-29

高橋良太（2008）「地域福祉新時代への期待」鉄道弘済会編『社会福祉研究』120-121

谷本圭志（2012）「過疎地域の今後と課題解決の戦略」谷本圭志・細井由彦編『過疎地域の戦略』学芸出版社、12-25

平野隆之（2005）『共生ケアの営みと支援－富山型「このゆびとーまれ」調査から』CLC

福留舞香（2005）「大金久の老人達」大和村誌編纂委員会『大和村の民俗　大和村誌資料集2』15-92

三好禎之・長谷中崇志（2011）「島嶼部における生活と互助社会の変容に関する研究」『名古屋経営短期大学紀要』（名古屋経営短期大学）52、143-161

南日本新聞社「高齢者の生活集落サポート『買い物代行、1人向け惣菜も販売』大和村大棚　結の会」2012年1月22日

南日本新聞社「島唄伝承　地域と一丸　大和・名音小」2015年1月31日

南日本新聞社「幸いのシマ　大和村の挑戦（3）」2015年3月27日

山口県社会福祉協議会（2010）『地域福祉の活性化をすすめるヒント　地域福祉活性化システム研究委員会報告書』

大和村誌編纂委員会（2010）『大和村誌』

和田敏明（2011）「ともに支え合う地域社会の実現に向けて」『月刊福祉』94（1）全国社会福祉協議会、38-41

鹿児島県HP（https://www.pref.kagoshima.jp/ac09/tokei/bunya/jinko/jinkouidoutyousa/nennpou/h29.html）

鹿児島で暮らすHP（http://www.kagoshima-iju.jp/introduce/yamato/）

住民流福祉総合研究所HP（http://juminryu.web.fc2.com/）・大和村HP（https://www.vill.yamato.lg.jp/fukushimatsuri.html）

The Current State and Problems of Mutual Help Activities of the Island Village :The Interview Survey of the Representatives Who Support the Mutual Help Activities

Asako OYAMA

The purpose of this study is to research the mutual help activities of the island village as welfare resources. This village as a function group, different from traditional local communities, is developing new activities.

The features of the activities are as follows: map making helps to form many activity organizations; the village residents who don't participate in the organizations use the base of the organization; as by-products, alternate functions of inactive women's associations and clubs of the aged are found in some groups. As for the government support, they set the scene for introducing the group activities.

The mutual help activities in the community caused awareness-raising among the residents and also made them recognize the value of self-help and mutual help. As a result, I confirmed the measures not only to solve welfare problems immediately and directly but to look for a desirable situation for the residents of the community.

Key Words: Island village, welfare resources, map making, by-products